

ニューヨークタイムズ社説

広島から核兵器のない世界へ

ニューヨーク・タイムズ編集委員会 2016年4月12日（紙面では4月13日付）



Credit Jun Cen

ジョン・ケリー国務長官が「胸をえぐられるような」と形容した月曜日の広島原爆慰霊碑への訪問は、いくつかの目的を果たすものであった。米政権で最上級の高官として現地を訪れた彼は、第二次世界大戦でもっとも悲惨な攻撃の犠牲者に弔意を表し、その後70年、日米両国がいかに強力な同盟関係を築いてきたかをふり返った。彼はまた、「戦争を決して最初的手段としてはならない」と強調し、核兵器のない世界に向けた努力を継続するよう求めた。

これまで米国政府高官が原爆慰霊碑を訪問しなかったのは、米国による広島と長崎への核攻撃で主に非戦闘員が20万人も殺されたことへの微妙な感情があったからだった。ケリー氏はその道を開いた今、来月G7サミットで訪日するオバマ大統領が、広島を訪問する最初のアメリカ大統領となるのを妨げるものはなくなった。しかし彼は、しばみつつある核兵器のない世界のビジョンが息を吹き返すような、具体的な新たなイニシアチブを打ち出す用意をしておくべきだろう。

オバマ氏は一期目に核兵器のない世界という野心的な目標を掲げ、大きな期待を作り出した。「世界は変わらないと唱える者たちの声を無視」することが必要だ、と彼は 2009 年のプラハ演説で語った。いくつか重要な措置も達成している。そのうち最も顕著なものは、イランの核開発能力を大幅に制限した 2015 年のイラン核合意と、米ロそれぞれの配備済み戦略核弾頭を 1550 まで削減することを義務づけた 2010 年の新 START だろう。

それ以上の進展は、一部にはロシアによって阻まれてきた。ますます攻撃的になったウラジーミル・プーチン大統領は、さらなる核兵器削減に関する協議を拒んだ。共和党主導の上院は包括的核実験禁止条約の批准を審議することを拒否した。そしてパキスタンは、核分裂性物質生産禁止条約の交渉を妨げてきた。

しかし、主に核兵器の課題によって 2009 年ノーベル平和賞を受賞したオバマ大統領は、大胆な行動に踏み切る機会を利用することができなかった。中国、インド、パキスタンを核開発の中止に向けた交渉に引き入れることができず、また自国の核兵器の警戒態勢を解除することもできなかった。彼が米国の老朽核兵器を近代化する 1 兆ドル計画を承認したことは、「核兵器のない世界」という自らの崇高な約束を台無しにしてしまった。

オバマ氏が、ささやかだが実行可能な措置で自らの反核の遺産を宣伝する時間はまだ残されている。新型の空中発射巡航核ミサイルの開発を中止すべきだ。また、CTBT が発効に至らないうちでも、北朝鮮以外のすべての国々が順守している核実験モラトリアムを国連安保理事会が承認するよう働きかけ、核実験を監視する CTBT 機構を常設化するよう主張すべきである。もしオバマ大統領が本当に広島を訪問するのであれば、それを価値あるものにする必要がある。